

研修旅行

信徒発見150周年記念企画—キリシタンの里 平戸・生月を訪う旅

趣旨：2015年は大浦天主堂で、「サンタマリアのご像はどこ？」という言葉で、宣教師がいなくなってから250年もの間、禁教令の下、潜伏していたキリシタンが見つかったという、信徒発見から150年目を迎える年です。キリスト教文化研究センターでは、その意義を改めて考え再確認するために、キリシタンの里—平戸・生月方面への研修旅行を企画いたしました。平戸・生月の各地の教会や聖地を巡り、長いキリシタンの歴史を追体験する研修旅行です。

また、潜伏キリシタン時代の様子を今に伝える異国情緒豊かな平戸・生月を旅しながら、鹿児島純心女子学園の現在、或いはかつての教職員や関係者が共に旅することで、純心ファミリーの成員として相互の親しみと絆を深めることも大変意義深いことでしょう。

対 象： 鹿児島純心女子学園 現、前教職員

日 程： 平成27年9月3日(木)～5日(土)

主 催： 鹿児島純心女子大学キリスト教文化研究センター

旅 程： 次頁参照

旅行会社： 旅丸ツーリスト(近畿日本ツーリスト 代理業)

旅行先	長崎	旅行日	平成27年09月03日(金) ～09月05日(月) (2泊3日)	人員	15名 (添乗員0名)	一般旅行業務取扱主任者	事業所長	田之上隆文
日次	月日・曜日	行 程						
①	09/03	8:00 大学	8:50 鹿兒島中央駅西口 == 鹿兒島 IC == セントラルホテル佐世保 == 14:00 (昼食)	9:00	13:00	17:30	担当者	津 曲 正 己
	(金)	15:00 == 平戸・上神崎教会 == 平戸ザエル記念教会 == 松浦資料博物館 == ホテル	16:10	16:30	17:10	17:30	平戸海上ホテル	
②	09/04	8:30 ホテル	9:10 生島・島の館 == 山田教会 == ガスバル教会 == 塩俵の断崖 == 大バ江灯台	9:40	10:45	11:10	11:30	平戸
	(土)	12:30 == 『母々の手』 == 平戸キリシタン資料館 == 細差教会 == 木々津教会 == 宝亀教会 == 17:00 ホテル	13:50	14:20	14:30	14:50	15:00	たひら温泉
③	09/05	8:30 ホテル	8:40 田平教会と墓地 == 九十九島巡り == 佐世保 == 鹿兒島中央駅西口 == 大学 (昼食)	10:00	11:00	12:00	12:20	サムソンホテル
	(日)							

信徒発見150周年記念企画 ーキリシタンの里 平戸・生月を訪う旅ー

『ここにおります私どもは、みなあなた様と同じ心でございます。』

.....

『私たちは、みんな浦上の者でございます。浦上では、ほとんどぜんぶの者が、私たちと同じ心をもっております。』

それから、この同じ人はすぐ私に聞きました。

『サンタ・マリアのご像はどこ？』.....

私はあなたがフランスから私たちのために持参してくださいました聖母のご像がおいである祭壇に、彼らを案内しました。.....』

プチジャン神父がジラル神父にあてた手紙より

鹿児島純心女子大学キリスト教文化研究センターでは、本年(平成27年)、信徒発見から150周年を記念して、キリシタンの里 平戸・生月を巡る旅を企画した。鹿児島純心女子大学及び鹿児島純心女子短期大学の教職員ならびにOBの方々に呼びかけたところ、総勢18名の参加を得て、9月3日(木)から5日(土)の2泊3日で長崎県平戸島・生月島のキリシタンゆかりの地を訪れるという貴重な旅になった。途中、7カ所の教会に立ち寄り、うち3カ所でミサが挙げられた。天気にも恵まれ、それぞれの心に忘れがたい感動を残した巡礼の旅でもあった。

1日目 9月3日(木)

8月25日深夜から26日早朝に九州地方を襲った台風15号は、各地に甚大な被害を与えて去った。本学でも多くの木々が倒れ、体育館が雨漏りをするという近年にない大きな爪痕を残した。その後もすっきりとした天候に恵まれず、研修旅行当日も

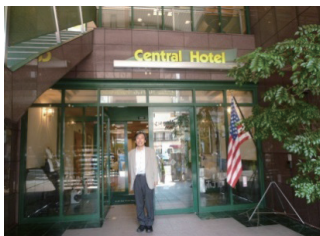


明け方まで激しい雨が降り道中が心配されたが、幸いなことに午前8時頃には小降りとなり、参加者一同ホッとした気持ちで出発を待った。

川内からの参加者5名を乗せたバスは、予定通り9時前には鹿児島中央駅に到着し、待っていた他の12名の参加者も合流して一路長崎に向けて出発することとなった。旅行社の津曲さんの見送

りを受け、運転手の「3日間、安全運転で参ります。」の挨拶に拍手も起きた。途中、桜島サービスエリアで永松先生が乗車、キリスト教文化研究センターの岡村所長から「有意義な研修旅行になりますように。」との挨拶があった後、参加者それぞれが旅行への期待を込めて自己紹介した。

途中、宮原サービスエリアと金立サービスエリアで休憩し、午後1時30分によやく昼食場所である佐世保市のセントラルホテルに到着した。おいしい松花堂弁当をいただき、午後2時30分にホテルを出発、一路平戸島へと向かった。このとき、長崎地方には既に素晴らしい秋空が広がっていた。



午後3時過ぎに平戸大橋を通過すると、そこにはこれから3日間ガイドをしていただく高田久美子さんが待っておられ、その後その巧みな話術にすっかり魅了されることとなる。

上神崎教会

午後3時20分、最初の訪問地である上神崎教会に到着、竹山神父によって1日目のミサが挙げられた。

上神崎教会は、昨年の6月に献堂されたばかりの真新しい木造の教会で、正六角形の形状を持つ独特な造りの聖堂であった。平戸大橋を遠景に望む見晴らしの良いこの地は、かつては松浦藩の放牧地であったという。1880年頃、主に黒島と五島から新たな生活の場を求めて信徒達が上神崎の地に移住してきた。明治24年(1891年)3月、信徒達は極貧の中、一致協力して海岸よりの潮の浦に聖堂を建設したのが初代の上神崎教会であるという。その後、田平や紐差の教会堂ができるまでは北松浦地区随一の教会堂であった。初代の教会堂が老朽化し手狭になったことなどから、昭和44年7月



に現在地へ移転・新築された。赤い屋根と白い壁が遠景に美しく、44年の歴史を刻んだが、雨漏りなどの老朽化のため立て直しが決められた。そして昨年、平成26年6月にユニークな建築に現代社会へのメッセージをこめて新たな歴史を刻み始めた。(上神崎教会ホームページより)

敷地内には、先祖の信仰が苦しみを経た後、この地で再び芽を出した喜びを象徴する碑が置かれている。

ミサの後、地元の信者さんたちから名物のキリシタン饅頭とコーヒーの接待を受け、

一同感謝していただいた。また、ここで平戸巡礼手帳(スタンプラリー形式になったもの)を求め、記念すべき最初のスタンプを押していただいた。信者の方々の心のこもったおもてなしに、長時間のバスの旅の疲れもすっかり癒された気持ちで、次の目的地である平戸ザビエル記念教会へ向かった。

平戸ザビエル記念教会

明治6年(1873年)キリスト教禁教の高札が廃止され、明治政府によるキリスト教の禁止も取りやめになると、平戸港市街地にも近隣各地から移転してきた信徒が増えていった。そして大正2年(1913年)、現在地の隣接地に「カトリック平戸教会」として仮の聖堂が建てられ、上神崎教会から司祭が巡回するようになった。昭和6年(1931年)に現在の教会堂が建てられ、早坂久之助司教によって献堂式が行われた。教会の保護者は大天使ミカエルであるが、聖フランシスコ・ザビエルの3回に渡る平戸訪問を記念して、昭和46年(1971年)にザビエル像が教会の脇に建立されたことから「聖フランシスコ・ザビエル記念聖堂」と呼ばれるようになった。現在は「平戸ザビエル記念教会」と改められている。

鉄筋コンクリート造りのゴシック様式による教会堂は誠に堂々とした威風を放っており、正面左側だけに八角形の塔をもつ左右非対称の独特な景観を有している。教会内部に入ると、左右の列柱の素晴らしさにまず圧倒された。松下学長の発声で静かに祈りを捧げた後、ガイドの高田さんから詳しい説明があった。一人のシスターが密やかに待機しておられる姿にも感動させられた。



ここから次の目的地である松浦史料博物館へは徒歩での移動である。初秋の深い影を宿した坂道を降りていくと、右手に旧平戸藩主の立派なお墓が並んでいる。坂の途中で振り返ると、光明寺・瑞雲寺の寺院と重なって聖堂の尖塔が聳えている様は誠に印象深い。博物館へ続く道は古い時代の街道であつたらしく、静かな佇まいを見せていた。山田洋次監督の映画「男はつらいよ」のロケ地にもなった場所であり、女優の藤村志保がマドンナ役となった映画の一場面を思い出すことであった。

松浦史料博物館

松浦史料博物館に着いたのは午後5時15分過ぎで、閉館時刻ギリギリであった。ここは平戸藩と藩主の松浦家の歴史を物語る品々を約3万点収蔵しているという。建物は明治26年(1893年)に松浦家の邸宅として建てられたもので、鶴ヶ峰邸と呼ばれて

いた。松浦家は鎌倉時代の初期にこの地に落ち着いて以来、幕末に至るまで650年あまりにわたって転封などなかったことから、武具や美術品、生活用品、オランダ渡来のものなど貴重な遺産が数多く残っている。(博物館ホームページより)

ガイドの高田さんの案内で、貴重な展示品の中から主な物だけを見せて貰った。中でも、江戸中・後期の藩主であった松浦静山の収集癖には驚かされた。一方で静山は江戸時代を代表する随筆集「甲子夜話」を著すなど、一流の文人としても活躍した。側室の子として生まれた静山(本名は清)を祖母(久昌院殿)が厳しく育てたという。久昌院殿の10箇条の教えの一つである「ほめ候者はわがあだ(仇)となり、そしる者はわが師なり」の文言は、誠に理にかなうことと感心した。谷文兆の大作も展示されており、「お宝鑑定団」なら一体如何ほどの価値が付けられるのかなどと下世話な想像をする自分が恥ずかしかった。

松浦史料博物館を出て港近くの駐車場で待機していたバスに乗り、今夜の泊まりである平戸海上ホテルに入ったのは既に午後6時を過ぎていたが、途中、平戸城が美しい姿で夕日に映えているのが見えた。



平戸海上ホテル

今夜の宿泊は全室オーシャンビューの平戸海上ホテルである。ホテルの目の前を海峡の急流が波を立てて流れる様は圧巻であった。

ヒラメの活き作りなど、海の幸満載の夕食に舌鼓を打ち、楽しい晚餐と懇談の時間は瞬く間に過ぎた。到着が遅れたため、ホテル自慢の温泉に入れたのは夕食後であったが、何と浴槽の周りが水族館になっていた。鯛や鰻、ウミガメまで泳いでいる様子を見ながらゆっくりと手足を伸ばし、1日目の旅の疲れを癒した。(文責 藤尾)

2日目 9月4日(金)

船のエンジンの音で目がさめた。窓の外は穏やかな風の海で、幾艘もの小型の船が右へ左へ進んでいた。中には岩だらけの小島に係留した船もあった。7時には朝食会場へ急いだが、宿泊客でいっぱいだった。バイキング形式の朝食をとって、早めに集合場所のロビーへ。すでにバスはホテルに来ていた。ガイドの高田久美子さんも私たちの出発を待っておられた。今回の研修旅行に参加している皆さん全員が元気にバスに乗り込み、まずは本日最初の目的地、「生月町博物館・島の館」へと向かった。途中、生月大橋を渡った。この橋は水色が印象的な大きな橋で、平戸と生月をつなぎ、1991年に開通したとのこと。全長960m、中央径間の支間400mはこの形式では世界一とのこと。

生月町博物館・島の館:この博物館ではかくれキリシタンや捕鯨といった生月島の特徴的な歴史や文化が、豊富な資料や模型、映像などで紹介されていた。まずは時間の関係から博物館2階の生月におけるかくれキリシタンの歴史を博物館職員の山下さんが紹介して下さい。450年間、厳しい弾圧やガスパル西玄可の殉教や中江ノ島の殉教など、



相次ぐ受難の中にも信者達は耐え抜き信仰を受け継いできたこと、またこの生月島のかくれキリシタンの特徴として、16～17世紀の祈りの言葉であるオラショを唱えるなど、キリシタン時代に行われた信仰形態をよく残しており、研究者に注目されているとのことだった。生月の歴史、そこに暮らす人々の生活風景、そして信仰や礼拝の様子を模型や映像、音響などで体感させてくれる博物館だった。ちなみに博物館職員の山下さんはかくれキリシタンの末裔の方で、彼女自身の経験を交えながら分かりやすく説明をして下さった。特にオマプリ(和紙を十字の形に切り抜いて作ったもので、生月島や平戸島のかくれキリシタン信徒の様々な行事の際おもに魔除けとして、また葬式の時遺体の耳や襟に付けたりして用いられていたもの)を彼女の住む地域では他の地域とは違って口に入れて食べていたという話はとても印象的だった。その他、ゆっくり見る時間はなかったが、島の暮らしや島の周囲にいる海の生き物の剥製が多数展示されていた。特に1階展示室には生月島の捕鯨の歴史が紹介されていた。生月は江戸時代には捕鯨の島として有名であったとのこと、18世紀始め頃から捕鯨が始まり、19世紀始めには壱岐をはじめ西海各地の漁場に進出し、当時は日本一の規模を誇るまでになったということが詳しく紹介されていた。またここ生月は江戸時代に活躍し

た日本一の巨漢力士生月鯨太左衛門(身長227センチもあったそうです)の出身地でもあったそうだ。約30分ほど見学し、次の山田教会へと向かった。

山田教会:山田集落の高所に建つ山田教会は、大正元年(1912年)に鉄川与助氏の手により完成したレンガ造りのロマネスク様式の教会。下から見るとこうもりが翼を広げた形をした特徴的な天井は珍しい蝶の羽根のステンドグラスに彩られ、内部にある生月に関係した4つの殉教を紹介するレリーフや、黒瀬の辻(聖地ガスパル様)の松の木で作られた十字架、悲しみの聖母像などに、島の信徒が辿った受難の歴史を偲ぶことができた。この教会で本日はミサが竹山神父の司式のもとに行われた。旅の安全を祈りつつ、迫害を受けてきた多くの信者たちに思いをはせ、ミサにあずかった。また山田教会は看護学科の小楠範子先生の出教会でもある。小楠先生がまだ修道召命を受けるまえ、この教会で静かに祈っておられる姿が目の前に浮かんでくるようだった。ミサの後、山田教会のスタンプを押そうと巡礼(スタンプ)手帳を持って並んでいる先生方の姿がとても微笑ましかった。全員スタンプを押して、次のガスパルの殉教地へと急いだ。



黒瀬の辻:生月島を治めていたキリシタン領主、籠手田氏と一部氏が亡命した後、島に残った信徒を指導したのが西玄可(洗礼名ガスパル)だった。しかし、慶長14年(1609年)に捕えられ、黒瀬の辻で処刑・埋葬されたが、信徒達はここを聖地として崇め、カトリック信徒による記念碑が建てられ、祭壇も設けられていた。この場所の名前の由来は「クルス(十字架)の辻」がのちに「黒瀬の辻」となったと考えられている。6mの大きな十字架がそびえるように立ち、とても印象的だった。記念碑の近くには「ガスパル様の墓」があった。西玄可の遺骸は「教会の儀式」により葬られたとヨーロッパの記録にあり、この黒瀬の辻が葬られた場所とされている。西玄可はこの近くで処刑された妻ウルスラや息子ジョアンとともに、2008年、188福者となった。右手に広がる海には正面に殉教の島中江ノ島が見えた。弾圧の中でも信仰を失わなかった人びとに思いをはせた。



黒瀬の辻からバスで15分くらい北へ進むと、生月の景勝、塩俵の断崖へ到着した。

塩俵の断崖:柱がいくつも立っているような奇岩で、南北に500m、高さ約20mの規模を誇るそうだ。この地の人々はこれが塩俵を積み重ねた形と思ったそうで、この名が付けられたようだ。確かに並んだ亀甲模様をした石柱群が連なり、下方の岩は塩俵を積み重ねたように見える。玄海の荒波が刻んだ壮大な彫刻と言える。



塩俵の断崖からさらにバスで10分ほど北へ進むと、大バエ灯台が見えた。



大バエ灯台:生月島の最北部に位置する大バエ断崖の上に立つ白亜の無人灯台。灯台としては全国的に珍しい展望所も設置されていた。天候に恵まれ、視界いっぱい青い水平線が広がる景色が眺望できた。ガイドの高田さんがちょっとした絶景ポイントを教えて下さった。断崖側には岩壁が設置されていたが、その岩壁の間に一か所ちょうど人の頭が入るくらいの狭間があり、そこに頭を入れて下を眺めると、眼下には大パノラマが広がり、しかも冷たい風が吹き付けてとても心地よかった。いかに切り立つ断崖の上にこの灯台が立っているかがわかった。大バエ灯台で12時を過ぎたので、昼食に予定をしていた「漁師食堂 母々の手」へと向かった。

漁師食堂・母々の手:漁師の奥さんたちが切り盛りする、地元の魚・米・野菜をバイキング形式で提供してくれる食堂だった。漁師食堂と言うことで、いろいろな種類の刺身の盛り合わせだけではなく、揚げ物、焼き物、煮物、地元で採れた野菜、漬物など新鮮な海の幸・山の幸・地元の素材で作る家庭料理をお腹一杯堪能できた。食べきれなくて、もったいないくらいだった。



次に訪れたのは「春日の棚田」だった。春日の棚田を訪れることは当初企画になかったが、ガイドの高田さんの勧めもあって平戸市切支丹資料館へ行く途中立ち寄ることになった。1550年に平戸ではじめてキリスト教の布教が行われ、当時の記録には春日町には教会堂が建てられすべての住民がキリシタンであったと記されているそうだ。

禁教後は信仰を維持するため組織を作り、今でも家屋の中に納戸神と呼ばれる聖具が引き継がれているとのこと。住民は山間部から海まで連なる棚田を作り、平地が少ない山がちな場所で生業を営んだ。バスを降りて、春日の棚田の中ほどまで歩いて行った。ここの棚田はとても広大で整然として美しく印象深かった。稲も青々とし、日の光を浴びてとても眩しかった。また人形岩など自然が作り出した景観にも感銘を受けた。



平戸市切支丹資料館：根獅子地区は「かくれキリシタンの里」と呼ばれ、禁教の時代にも「納戸神」の信仰が続けられていた。納戸とは一般に物置を指し、寝室にも用いることがあるそうだ。しかしここの納戸は窓のない薄暗い部屋で一般来客はもちろん、家族もめったに出入りしない部屋で、この納戸に人目を隠れて、かくれキリシタンの神体が秘蔵され、祭られていたそうだ。

この切支丹資料館は、根獅子のキリシタンの聖地「ウシャキの森」に建てられ、江戸時代初期に伝えられた資料や信仰の品々などを収集・展示・保存している資料館であった。近年、世代交代とともに信仰がうすれつつあり、祭具などの散逸が危惧されるため、資料館を建設し保存につとめているとのこと。なぜかくれキリシタンの人々が幕末から明治になりカトリック教会に戻らなかったのか、その理由がこの資料館を訪れてはじめて理解できた。かくれキリシタンの人々の辛く苦しい胸の内がひしひしと伝わってきた。

予定を少し過ぎて、紐差教会に到着した。

紐差教会：1873年パリーミッション会の宣教師ペルー神父が平戸の田崎に仮の教会を設けた。現在の天主堂は1927年に着工し2年後に完成。大規模な天主堂で旧浦上天主堂が原爆によって倒壊した後は、日本最大の天主堂と言われたそうだ。東洋でも指折りのロマネスク様式で、内部にはアーチと美しいステンドグラスがはめ込まれ、鉄川与助の特徴であるとされる花柄の模様が豊かに飾られている。2010年に長崎県の有形文化財に指定された



そうだ。太陽の光を受けて床に映った色とりどりのステンドグラスの模様がとても印象的だった。また紐差教会の尾高修一神父に地下の展示室を案内していただいた。法衣やマリア像などキリシタンの人々にまつわる貴重な品々が多数保管されていた。一般に展示・公開するにはまだ多くの問題があるとのこと。しかし多くのクリスチャンが一度は見てみたいと思う貴重なものばかりだった。

予定を30分ほど過ぎて、今回この研修旅行に参加されている看護学科の萩原久美子先生の出身教会である木ヶ津教会に到着した。

木ヶ津教会:「静かな港町を優しく見守る木造の教会」の名にふさわしい美しい教会だった。この人たちは、慶応4年来日した宣教師ド・ロ神父によって信仰を受け、当時の迫害を逃れて、五島や西彼、そして黒島からやって来た人たちの子孫であるそうだ。現在の教会は、1962年(昭和37年)平戸猶興館高校の古い体育館を利用して建立されたものとのこと。永井隆博士の「14枚の十字架の道行」の絵がとても印象的だった。この絵は永井博士の生涯の最後のところに描かれたものだそうだ。この研修旅行に参加している皆さん全員で祈りをささげた後、永井博士の作詩された「長崎の鐘」や「ルドビコ様」の歌を歌った。また宝亀教会へ行くバスの中でも「純心マッチの歌」や「燔祭のうた」を歌った。ガイドの高田さんの目に涙が浮かんでいるのが印象的だった。



宝亀教会:小さな宝亀集落の最奥地の山あいにはひっそりと佇む教会。バスを降りて廃校になった小学校の運動場を通過して教会へと進んだ。この教会は1898年に紐差教会のマトラ神父の指導により、宇久島出身の宮大工・柄本庄市が施工したとのこと。両側に特徴的なベランダが設けられ、イギリス積のレンガ造りの外壁や尖頭アーチ式の円形窓、こもり天井など、建築学上多くの特徴を持つ聖堂は、光を集める南向きに建てられ、白い漆喰と赤いレンガ色のコントラストを美しく情緒的に映えさせている。地域に根付き、住民の祈りの声が聞こえてくるような教会。木造からレンガ造りへの過渡期の教会として2003年に長崎県の有形文化財に指定されたとのこと。

お土産を購入するために立ち寄ろうと計画していたかまぼこ店へは予定を1時間以上過ぎてしまい閉店していたが、平戸物産館は開いていたのでしばし買い物に興じた。そして平戸大橋を渡り焼罪史跡公園へ。

焼罪史跡公園:1622年キリスト教禁令の中、布教活動・救済事業を行ったイタリア人宣教師カミロ・コスタンツォ神父が火刑に処せられた。悲しい時代を今に伝えるため、この公園の平戸瀬戸を望む小高い丘に「殉教の碑」が建てられていた。しばし平戸瀬戸の海を眺める。ここから平戸瀬戸をはさんで対岸に平戸城と平戸ザビエル記念教会堂が見えた。今夜の宿、サムソンホテルは目と鼻の先にあった。



ホテル(サムソンホテル)

思い思いに温泉に入った後、夕食。夕食はバイキング形式で、食べ物とともに飲み物も自由に選択できた。和気あいあいと夕食のひと時を過ごすことができた(8時ごろから舞台では歌謡ショーも始まったが...)。時代に翻弄され、それでもなお形態を変えながら信仰され続けた平戸・生月の独自のキリスト教の歴史を心に思いめぐらしながら、今日一日の豊かな旅の余韻に浸った。(文責 岡村)

3日目 9月5日(土)

最終日、旅先でも早朝のウォーキングは欠かせない。5時過ぎ、薄暗い中を、右に平戸湾を見下ろしながら平戸大橋の方向へ下っていく。まもなく平戸市場、トロ箱を積んだ軽トラックが奥にある魚市場を出て行く。すでに魚のセリは終わったようだ。しばらく周囲を歩いた後、引き返す。坂道を上る。ゴーンという鐘の音、間を置いて再び響く。道路に面した右側の禅寺の鐘だ。時計は6時、あかね色を帯びた幾筋もの雲が流れる。キリスト教と仏教の混在を実感する。昨日、平戸切支丹資料館で見た仏壇の隣に並ぶ「納戸神」、禁教令が解かれた後も隠れキリシタンとしての信仰を守り続けている人々、その複雑な気持ちに改めて思いを馳せる。

8時10分、バスはホテルを出発。これまで天候に恵まれた旅、薄曇りではあるが何とか持ちそうだ。平戸市場でバスを降り、各自お土産(主に川内^{かわうち}かまぼこ)を買いそろえる。

8時40分、田平天主堂に到着。ここは竹山神父の出身地、神父のご兄弟が待っているらしかった。この地を訪れるのは10年ぶりとのこと。

八角ドームの鐘塔を載せた赤煉瓦造りの重厚なたたずまい、隣接して教会墓地、十字架を掲げた墓石が並ぶ。入堂すると、ヨーロッパ風のリブ・ヴォールト天井(アーチを平行に押し出したかまぼこ型の天井様式)、両側の鮮やかなステンドグラスが目をつける。1階はイタリア製、テーマは「新約聖書」から採られていて、大天使ガブリエルの告知に始まり、イエスの生涯、イエスの数々の奇跡とたとえ話、そして聖霊の降臨で終わる。2階はドイツ製、祭壇に向かって右側の窓は、人間が神の命によって生



涯を通して深められていく過程、左側は、教会が神の命で強められていく過程がそれぞれ表現されているとのこと。しばし見とれているうちに、竹山神父司職のミサが始まった。お父上の50年忌も、ここで作ったとのこと。感慨もひとしおのものがおありと推察する。「それぞれの教会には間違いなくその土地のキリスト者の信仰がある」、「殉教者はいない方がいい。殉教をさせる人間が存在しない世の中であってほしい」、「殉教者の願いはキリストの福音、共に生きる世の中を」、説教の言葉が、今回の旅をすでに巡礼の旅ととらえるようになった私達の胸に深くしみ、腑に落ちていく。「目に見えない現実を、どのように見て持ち帰るのか」、いくつかの教会を訪れ、そして日々のミサを通して、私たちは、心の構えをいつしか作り上げていた。それぞれが、風景

の向こう側にあるものに触れている自分に気づいていた。

ミサが終わると、信徒の方から説明があった。建堂97年、当時を知る人はシスター森中のご母堂だけとのこと。禁教令が解かれた後も、田平にはカトリック信者の姿はなかった。1886年、黒島から3家族、出津から4家族の信徒が移住し、その後、数が増えて祈りの場を望む声が大きくなり、1918年5月、「日本26聖殉教者」に捧げて献堂された。設計及び施工は長崎県内の数々の教会堂建築に携わった鉄川与助、彼の煉瓦造りの天主堂の集大成と評価されている。建設は、信徒の手作業によって行われた。レンガ・瓦・セメント・木材などの材料は船で運ばれ、石灰は持ち寄った貝を焼いた。26聖人に捧げられた教会ということから、26人の司祭が出るようにとの思いがあるとのこと。ここから多くの聖職者を輩出している。現在まで21人の司祭、2人の助祭(1人は来年司祭叙階の予定)、シスターも102、30人は出ているとのこと。田平の地に神の召命の豊かさを感じた。しかし、信徒の方は「今や神学生もいない、26人になるまであと何年かかるだろう」と言われる。加えて「世界遺産候補を手放しでは喜べない。観光客が増えることに信者は関心がない。今のところマナーに問題はないが、床は大丈夫だろうか、外回りはどうだろうか、そっとしておいてほしい」とのこと。確かに「それぞれの教会には間違いなくその土地のキリスト者の信仰がある」、観光客の目に映る風景との間に大きな落差を感じる。

10時10分出発、国道204号線を佐世保へと向かう。旅の最後のメニューは九十九島巡り。遊覧船は11時出発予定。間に合うだろうか。九十九島パールシーリゾートの駐車場にバスが滑り込む。発着場までみんなで走る。シスターが走る。森中シスターが先頭を走る、そして山口シスターが。土曜日ということもあって混雑する中をかき分け、ぎりぎり2分前に乗船。遊覧船パールキーンはほぼ満員の状態。「九十九」は数え切れない



ほどたくさんの意味、2001年の市民ボランティアの調査の結果208の島が確認されたとのこと。島々の間を、船は縫うように走る。牡蠣の養殖筏やカヤックに興じる人々の間を抜けていく。舳先が白い波しぶきを上げながら濃紺の海をかき分けて進む。大小とりどりの島々がめまぐるしく過ぎていく。船のスピードに、視線が追いつかない。形や由来から名付けられた島々の一つ一つを、船内放送の案内を聞きながら地図上のそれと照合していたが、途中であきらめた。「名前はどうでもいい、この素晴らしい景色をのんびりと楽しもう」と覚悟を決めて、デッキの一番高いところに上がる。360度に広がる海と島々を眺め、時折、デッキにひしめく観光客に目を向ける。笑いさんざめくグループ、カメラの前でポーズをとる若いカップル、日本に留学中の娘と一緒に

に観光を楽しむシンガポールから来た夫婦等々。50分間の遊覧を終え、発着場へ。すでに次の乗船客が行列を作っている。

近くのホテルで昼食。大安ということで結婚式が行われているようだ。何となく華やいだ気分のうちにイタリア料理を堪能した。ピザ、パスタ、今日もお腹いっぱい食べた。

13時30分、バスは一路、鹿児島へ。それぞれが、今回の旅行の感想をマイクを通して述べる。いくつかを紹介する。「おいしい料理を堪能した。地元の人々の厚い信仰と人情に触れた」、「7つの教会を巡り、よこしまな心が正される気がした」、「温かい雰囲気の中で心が満たされた」、「実際に見ると状況が分かる。現場を見て理解することの大切さを学んだ」、「心が洗われた」、「信仰を守ってきた人たちの思い、信仰の深さに心を打たれた」、「カトリックに復帰しない人々の思いに胸が痛む」、「鹿児島にはない自然、隠れキリシタンに思いを馳せた」、「自分の出身地を違う視点で見ることができた」、「カトリックに戻った人、戻らなかった人、これからの私の宿題になった」、「見えないものを見てほしいと言ったが、それぞれにいくらか実りを感じてくれた」、「真面目な所だけでなく、ゆっくりした旅だった」。そして岡村所長の「巡礼の旅だった」、竹山神父の「徹底した準備ぶりにあきれた」という言葉が、今回の旅を如実に物語っている。藤尾所員が「美しき天然」を高らかに歌い上げる。シスターの皆さんの信徒発見100周年記念「まことの教え」が静かに車中に流れる。満足しきった18人を乗せて、バスは18時30分、鹿児島中央駅に到着。 文責 獅子目

